



七夕伝説の謎を解く

勝俣 隆 著

大修館書店 四六判 306頁 定価2,200円+税

読み物
お薦め度
5
☆☆☆☆☆

「あれがデネブ・アルタイル・ベガ、君が指さす夏の大三角…」(「君の知らない物語」より)という歌が一時期流行するなど、夏の大三角を構成する織姫と彦星の織りなす七夕伝説は、日本で最も有名な星にまつわる伝説だと思います。七夕の時期になると、さまざまな場所で七夕飾りが飾られています。天文学者に限らず、「あれがここと座のベガで織姫様、あっちがわし座のアルタイルで彦星様。間をよく見ると天の川が見えます」という紹介をした、もしくはされた人も多いと思います。

ただ、天文学を勉強している人の場合、「年に一度、織姫と彦星が逢うなんて、ベガとアルタイルの距離は14光年以上離れてるんだから、絶対無理じゃん」とか、「いや、星の年齢を考えると1年なんて大した時間じゃないし、意外としょっちゅう会っているんじゃない？」などと思ったことがある人もいるのではないのでしょうか。また、子供向けのイベントなどで、「織姫と彦星、どちらが天の川を渡って逢いに行くと思う？」というクイズを出し、「答えは…両方が天の川を渡って真空中で合流します！その証拠に、織姫と彦星の間にあるアルビレオという星を望遠鏡で見ると綺麗な青い星とオレンジの星が寄り添っているのが見えますよ」という勝手な解釈を付け加えて観望会の導入に使ったこともあります。実際(というのも変ですが)には、七夕伝説が誕生した中国と、それが日本に伝わってきた後では、織姫と彦星のどちらが渡ってきたかについても変化があり、その原因となる時代背景や文化の違いがこの本を読む

とわかります。

また、帯に書いてある通り、「七夕」をなぜ「たなばた」と読むのかをはじめ、七夕伝説に類似している羽衣伝説、奈良時代に中国から伝わったあとの日本での広がり方、裁縫や技芸向上を願う乞巧奠(きこうでん)など、七夕伝説や風習について、謎を解き明かすように詳細に紹介されています。和歌や漢詩なども数多く取り上げられ、漢文や古文などを読むのは高校生の時以来(しかも苦手分野)でしたが、現代語訳もありスムーズに読むことができます。読み終わる頃には、年に一度しか会えない思いを詠んだ詩や、恋人を亡くした人が、年に一度でも逢えるなんて羨ましいという切なさを詠んだ詩など、日本語の持つ美しさも少し感じる事ができた気がしました。

現在の暦で七月七日は梅雨の時期です。雨では織姫と彦星は逢えないのか、それとも逢えた嬉し涙かという話もしましたが、最近は雨が降ったらゲリラ豪雨ということも多く、なかなか風流とは言いがたい印象です。一方で本来の七夕は旧暦の七月七日(例年8月のどこか)で行われていたため、晴れる日が多かったことと思います。旧暦の七夕を国立天文台では「伝統的七夕」と呼び、2025年は8月29日になります。最近は短冊に願い事を書くだけの行事になってしまっているかもしれませんが、今年はお盆に水を溜めて葉を浮かべ、織姫と彦星を映して眺めるというのも、風流かもしれませんね。

日下部展彦(アストロバイオロジーセンター)